

Global Dialogue

グローバル・ダイアログ — 世界社会学会ニュースレター —

編集部より

この『グローバル・ダイアログ』第3号より、私たちの活動は拡大していきます。翻訳チームとしてのボランティアたちが2カ国——日本とブラジル——から新たに名乗りを挙げたことにより、以前からの5か国語バージョンに、さらに2か国語分が加わりました。このような翻訳チームのネットワークを通じて、『グローバル・ダイアログ』は若手社会学者の国際的コミュニティを築きつつあります。今号は、インターナショナリズムの優れた追求者の一人である、日本社会学会会長の矢澤修次郎氏へのインタビューから始まります。そして次に続くのが、ISAの副会長であるマーガレット・エイブラハムによる、2012年にブエノス・アイレスにて開催予定のワールド・フォーラムへの構想です。その大会テーマである「社会正義と民主化」は、開催地委員会のラテンアメリカ社会学会(ALAS)会長のAlberto Bialakowskyと、アルゼンチン社会学会(AAS)会長のAlicia Palermoによって提案され、研究調整委員会(Research Coordinating Committee)によって承認されました。このテーマは、特にラテンアメリカにおける社会運動を鑑みたものですが、しかし、最近の顕著な例で言えばチュニジアやエジプトなど、他のどの場所にもあてはまるものとは言えるでしょう。そして今号でも、今日のインターナショナリズムの意義についての対話は続いています。ウルリッヒ・ベックによるレーウィン・コンネルへの返答、ヘルマ・ルッツによるドイツの「コスモポリタニズム」についての再考、そしてサリ・ハナフィによる「マルチ・バーサリズム」の背後にあるビジョンの検討が掲載されています。また、中国、マレーシア、オーストラリア、ポーランド、コロンビア、そして国連についてのレポートも含まれています。ジェニファー・プラットはISA事務局の歴史について執筆しています。それは社会学のインターナショナリズムにとってダイナミックな基盤となっています。またジェニファー・シュレイディーは、我々のコミュニケーションがますます依存度を高めている新たな情報技術というものが、実際には世界の多くの場所から社会学者を排除しているのではないか、という疑問を投げかけています。(芝真里訳)

目次

編集部より	1
稀にみるインターナショナリスト	1
2012年ISAフォーラム開催地はブエノス・アイレス	1
【討論】	
ベックからコンネルへ	3
コスモポリタニズムからパブリック・ソシオロジーへ	3
マルチ・バーサリズムについての会議	8
【地域より】	
中国: 経済成長に直面して	9
オーストラリア: オーストラリア社会学会年次大会: 速報	12
ポーランド: サイエンス・サークル	12
マレーシア: 環境の変動	11
コロンビア: 関心を抱かれている社会学	14
国連: 組織犯罪	10
【随想】	
歴史の窓	4
社会学者とグローバルなデジタル格差	13
社会学と運動家との連繫	15

矢澤修次郎

——稀にみるインターナショナリスト——

SHUJIRO YAZAWA:

INTERNATIONALIST *PAR EXCELLENCE*

現在日本社会学会会長をつとめている矢澤修次郎は、地球上を飛び回り、行く先々で社会学を吸収してきた。彼は、彼と彼が属する国際的な研究集団がマルチ・バーサリズムと呼ぶ社会学の歩く体现者である。彼は、45年にわたって日本で社会学を教え、15冊(編著を含む)、70本を超える論文を書いている。また彼は、1994年から2002年まで、国際社会学会の理事をつとめ、長年にわたって日本で世界社会学会議を開催することを唱道してきた。その年来の夢が2014年に叶うわけである。本インタビューは、マイケル・ブラウオイが、2010年12月6日に横浜の寿司屋で行ったものである。

ブラウオイ: 矢澤教授、あなたは何故、長年にわたって日本で世界社会学会議を開催することを推進してきたのでしょうか。その理由をお聞かせください。

[2ページへつづく](#)

ブエノスアイレスのタンゴ

——2012年 ISAフォーラム——

LET'S TANGO IN BUENOS AIRES

マーガレット・エイブラハム

(ISA副会長・研究部門、ホフストラ大学)

by Margaret Abraham, Hofstra University, ISA Vice-President for Research



ブエノス・アイレスへ!

ISA役員会の協議の結果、2012年ISAフォーラム(2012年8月1日~4日)の開催地として、ブエノスアイレスが選ばれたことをお伝えできるのは、大変喜ばしいことです。

ISA役員会は、開かれた協議を行うために、2010年11月15日を期限として、各RC(Research Committees)、WG(Working Groups)、TG(Thematic Groups)、NA(National Associations)から、2012年ISAフォーラムの開催地についての入

[4ページへつづく](#)

矢澤修次郎 SHUJIRO YAZAWA (つづき)

矢澤:日本で世界社会学会議を開催することが、日本の社会学の発展につながると信じているからです。今年日本社会学会は、83回目の年次大会を開催しました。つまり日本社会学は80年以上の歴史があるわけですが、その間、日本の社会学は世界の社会学と相互的な関係を持ってきたとは、必ずしも言えません。勿論、我々は欧米の社会学を勉強・輸入し、その影響を強く受けてきたのですが、日本社会学の成果を世界の社会学の中で検証したり、世界の社会学の発展に資するようにしたりすることは、必ずしも十分に行われてきませんでした。そのことが、日本の社会学が世界において知られていないだけではなく、日本の社会学者にとっても日本の社会学の特徴・性格が今一つ明確にならない一つの原因になっているように思います。たとえば、今私は2014年を迎えるにあたって、世界の社会学者に向けて日本の社会学を紹介する論文を執筆しているのですが、社会学の個別の領域で何が行われているのかの紹介は難しいのですが、この80年日本の社会学が総体として何をめざし、何を実現し、どれだけアカデミズムを作りかつまたそれを越えて社会的意味を持ったのかを説明するのはきわめて難しいと感じています。日本の社会学は、欧米の社会学を導入し、それを理解・解釈しましたが、より一層それらを使ってより深く日本社会の分析をし、日本社会を説明する必要があります。またその結果を世界の社会学者と議論する必要があります。その結果、日本社会学と世界の社会学の統合が進み、より一般的な社会学、さらには普遍的な社会学の創造に道が開けてくると思います。勿論、その社会学はモダニティの単一の普遍性を意味するものではなく、複数の普遍性の部分を構成するものであると考えますが。

ブラウォイ:マルチ・バーサリティとは何でしょうか。

矢澤:如何なる社会学も、それが置かれた、あるいはそれが対象とした社会に規定されて特殊・個別的な内発的な社会学である他ありません。従ってわれわれはそこから、より一般的で普遍的な社会学を作り上げる努力をするわけですが、その一般的・普遍的な社会学は、決して一つではありません。欧米の社会学も様々ある一般的・普遍的な内発的な社会学の一つにすぎません。そのことを意識して、われわれは、更に社会学を発展させて行かなければならないと考えます。たとえば東アジアでは、1970年代以降、内発的な社会学を作ろうとする運動が台頭し、現在、中国や韓国の社会学は、日本の社会学よりも内発的な社会学を作ろうとする動きが強いと思います。この地域では社会学者の国際交流が盛んに行われていますから、どちらかというと欧米の社会学の影響力が強い日本の社会学も、中国、韓国、台湾の社会学から大きな良い刺激を得られると思います。

ブラウォイ:日本で世界社会学会議を開催することに抵抗する動きはありましたか。

矢澤:いえ、ありませんでした。過去に何度か国際社会学会から、世界社会学会議を引き受けてくれないかの打診がありました。1960年代以降、3度ほどあったと記憶しています。しかし毎回NOという返事をしてきました。理由は、学会に財政的余裕がないということです。だから開催を引き受けるに必要な資金をどうやって得るのが問題だったのです。それにもう一つ、会議を開催して、日本社会学にとってだけのメリットが得られるのかという疑問もあったのだと思います。日本国内には、相対的に大きな本の市場があります。したがって大学教授は、自著をその市場で売って、自分の社会的威信を高める道が開かれています。その結果、わざわざ外国語で論文や本を書いて、研究者の国際競争を潜り抜けて、世界で評価を勝ち得ることにそれほど積極的な関心をもっていないのです。国際的な舞台で仕事をしたり、論文を書いたりする場合でも、国内において、功成名遂を遂げてからという場合が圧倒的ではないでしょうか。だから私たちが世界社会学会議

を日本で開催しようと提案した時も、私たちがあまりにも国際的な舞台を志向しすぎているという批判がありえたのだと思います。日本には、まだまだ、限られた数の国際的に志向した研究者と、圧倒的な数の国内を志向している研究者との間の見えないギャップがあるのかも知れません。会議をやることは、このギャップの解消に役立つと思います。

ブラウォイ:あなたは、一貫してインターナショナリストだったのでしょうか？

矢澤:はい。私は1942年に銀座で生まれました。私の幼少期は、みな貧しい時代でしたが、戦後民主社会建設の熱気はあったように思います。私の遊び場は、銀座・日本橋のデパートで、そこでは沢山の外国製品が売られていました。そこで放課後スポーツ用品、とりわけ野球用品を見るのが好きでした。また勉強する場所が限られていたので、公共図書館によく通いました。図書館では子供セクションと成人セクションがあったのですが、子供のセクションではなく、大人のセクションに行って、手当たり次第に本を読んだことを覚えています。

ブラウォイ:どんな教育を受けましたか？

矢澤:英語は中学校から習いました。でも私の父親は、英文の本やパンフレットも印刷する小さな印刷会社を経営していたので、父親の仕事から、英語の本を読むことを学びました。当時は戦後民主主義社会が一つの岐路に差し掛かった時代でしたから、高校生の時から政治に目覚め、1960年には高校生ながら日米安保反対のデモに参加したりしていました。しかし残念ながら、1962年に東京大学に入学した時には、運動はすでに下降線を辿り、デモに参加しても、警官隊の数のほうが多いような状態になってしまいました。

ブラウォイ:大学では社会学を勉強したのですか。1962年当時、日本にはどのような社会学があったのでしょうか。

[5 ページへつづく](#)

『グローバル・ダイアログ』編集委員会

編集長: Michael Burawoy

編集主任: Lola Busuttil, August Bagà, Genevieve Head-Gordon

編集委員: Margaret Abraham, Tina Uys, Raquel Sosa, Jennifer Platt, Robert Van Krieken

顧問編集委員: Izabela Barlinska, Louis Chauvel, Dilek Cindoglu, Tom Dwyer, Jan Fritz, Sari Hanafi, Jaime Jimenez, Habibul Khondker, Simon Mapadimeng, Ishwar Modi, Nikita Pokrovsky, Emma Porio, Yoshimichi Sato, Vineeta Sinha, Benjamin Tejerina, Chin-Chun Yi, Elena Zdravomyslova.

地域編集委員:

ブラジル: Gustavo Taniguti, Juliana Tonche, Pedro Mancini,

Fabio Silva Tsunoda, Juliana Oliveira Carlos, Andreza Galli

日本: 芝真里, 塩谷芳也, 姫野宏輔, 高見具広, 速水奈名子, 池田和弘, 岩館豊

スペイン: Gisela Redondo

台湾: Jing-Mao Ho

フレッシュ・キドニー

——コスモポリタン理論は南の社会学に何を語るべきか——

FRESH KIDNEYS: WHAT DOES COSMOPOLITAN THEORY HAVE TO SAY TO SOUTHERN SOCIOLOGY

ウルリッヒ・ベック(ルートヴィヒ・マクシミリアン大学・ミュンヘン)
by Ulrich Beck, Ludwig-Maximilian University, Munich

本紙「グローバル・ダイアログ」はいま始まったばかりであるが、「グローバル・モノログ」になってしまう重大な危機に瀕している。私はかつて論文で次のように述べたが、それは現在にも当てはまる。「私たちはコスモポリタニズムの時代ではなく、コスモポリタン化(cosmopolitization)の時代を生きている。レーウィン・CONNELL(Raewyn Connell)は次のように修辞的に問いかける。『私たちは、これらの概念において北の語りを聞いているのではないだろうか』と。」

そこでまず、何が「コスモポリタン化」ではないのかについて挙げておきたい。レーウィン・CONNELLが示唆したように、コスモポリタン化とは19世紀社会学における啓蒙的な普遍主義を無視することではない。それは、「特権を与えられたマイノリティの経験と、世界における新たな現実としての処遇」を反映するものでもない。それはどこか高度な位置に特定された、いわゆるヨーロッパ啓蒙思想からの視点でもない。そしてそれは、「私たちはすべて繋がっている」という浅薄な政治的メッセージを伝えるよう意図されたものでもなければ、帝国主義やグローバル・パワー関係の存在を正常化しようとするものでもない。

では「コスモポリタン化」という概念は、何について語るべきであろうか。そして、なぜそれは数ある「コスモポリタニズム」——カント、ヘーゲ

ル、ハーバーマス、ヌスバウム、アッピア、ベンハビブ、ヘルドらが論じたもの——からきちんと区別することが重要なのだろうか。「コスモポリタン化」とは、倫理ではなく事実なのである。このことを論じるにあたり、「フレッシュ・キドニー(新鮮な腎臓)」ほど分かりやすい例はないだろう。

ナンシー・シェーパー・ヒューズ(Nancy Scheper-Hughes)によれば、移植医療の勝利(危機ではない!)は、それ自身の倫理的基盤を一蹴し、「フレッシュな」臓器を売買する世界市場への供給を伴って、目に見えない影の経済への水門を開いた。この徹底的に不平等な世界においては、わずかばかりのお金を得るために、腎臓や肝臓の一部、肺、目、そして睾丸まで売ることが熱望する、絶望的な状況にある人ひとりが不足しているわけではないことは明らかである。そして、臓器入手に必死な金持ちの患者の運命と、必死な貧乏人たちの運命とが、それぞれ生存という基本的な問題を解決しようともがき苦しむことによって、眼に見えない形で反目するのである。これが、不純で現実存在する、剥奪のコスモポリタン化というものである。世界から排除された者や政治的に追放された者——難民、ホームレス、ストリート・チルドレン、非正規雇用労働者、囚人、高齢の売春婦、煙草密輸入者、そしてコソ泥たち——は、自分の臓器を売るよう誘われるが、このような流れは、非常に肥えた体の中に、しかも地球上で他人から臓器を買って自分の体に組み込むことができるお金持ちの中に、身体的、道徳的、そして経済的に「身体化される」ようになってきている。

新自由主義的な資本主義と制限なく選択ができる基本的な民主的権利の名の下に、モダニティの根本的な価値——身体、人間としての、そして生と死の意味における主権——が、誰もそれが私たちのコスモポリタン化時代を象徴するプロセスだと気づかないまま、虐げられているのである。

[6ページへつづく](#)

コスモポリタニズムから パブリック・ソシオロジーへ FROM COSMOPOLITANISM TO PUBLIC SOCIOLOGY

ヘルマ・ルッツ(ゲーテ大学・フランクフルト)
by Helma Lutz, Goethe University, Frankfurt

「コスモポリタニズム」とは、啓蒙主義に根ざした規範的な用語である。そして、コスモポリタニズムは、公正や民主主義、人権について議論する場合に検討される倫理的な概念である。寛容性は、コスモポリタニズムのハビトゥスを育むために欠かせないものだと考えられるが、寛容性という語が具体的に何を示しているかは必ずしも明確ではない。コスモポリタニズムは、多様なライフスタイルを認めるというように、相互理解を深め、政治的平等を促す一方で、他方では、権力や支配、社会的排除(抑圧的寛容)のための道具として利用されることがある。そこでは、(1)ありとあらゆる文化的・民族的差異はすべて許容されるべきなのか、または許容することができるのか(Joas)、(2)抑圧的寛容または受容的寛容を実践するとして、そのことをどのように正当化すべきなのか(Forst)、ということが争点となってきた。もし寛容性をコスモポリタニズムのための必須要件とみなすならば、多様な民族と文化が混在するなかで、「コスモポリタニズム」を主張することにはどのような意味があるのだろうか。

今日の民主主義国家における都市空間では、エリート主義的な「上からのコスモポリタニズム」ではなく、むしろ「下からのコスモポリタニズム」が必要とされている。スチュアート・ホール Stuart Hallは、「下からのコスモポリタニズム」に言及しながら「パナキュラーコスモポリタニズム」という概念を使用している。「パナキュラーコスモポリタニズム」とは、自分とは異なる文化を持つ人びとと日常的に接する経験を通して形成されるコスモポリタニズムである。しかしホールHallは、「文化は様々な規則や伝統の集合であり、内部矛盾がなく一貫した単一のものである

る。そして文化間の境界は明瞭である」という考え方には注意が必要だとしている。「われわれの世界を単純にいくつかの文化に分割することはできない。むしろわれわれに必要なことは、ひとつの文化やひとつのアイデンティティには限界があることを知ることである。すなわち、どのようなコミュニティに属しているかという情報だけでは、その人物がどのような人間であるかを十分に理解することはできない。特に都市空間においては、極めて多様な文化的表現が対立し、



政治の嵐の目に晒されるティロ・ザラツィン

相互に影響を及ぼし合っている。同時に、異なる文化に対する評価や受容についても人びとのあいだにかなりのバリエーションがある。ある人びとは、習慣や服装や伝統のような目に見える差異に着目し、それにこだわってしまうことさえある。そのような人びとは、服装などの差異を、差異の持ち主が自分たちの生き方とは距離を置いていることの表れだと考えてしまう。一方、別の人びとは、他者と自分たちとの価値観や慣習の共通性に積極的に着目する。たとえば、彼らは、文

[7ページへつづく](#)

ブエノスアイレスのタンゴ LET'S TANGO IN BUENOS AIRES

(つづき)

札を公募しました。この結果、アルゼンチン(ブエノスアイレス)・フィンランド(ヘルシンキ)・フランス(パリ)・メキシコ(メキシコシティ)・シンガポール・トルコ(イスタンブール)・イギリス(バーミンガム)・ウルグアイ(モンテビデオ)の8ヶ所から入札がありました。

慎重な検討と投票の結果、アルゼンチンが開催地の第一候補として選ばれました。その根拠としては、会場費が低コストであること(無

料施設)、参加者にとって物価指数が低いこと、ISAの世界会議は1982年以降南米で開催されていないという点で地理的多様性を重視したこと、アルゼンチンはISAの用いる経済カテゴリーでBに属していること、などがあります。

ラテンアメリカ社会学会(ALAS)、アルゼンチン社会学会(AAS)とその関係諸機関の皆様、おめでとうございます。そしてこの入札に参加していただき、会場をご提供くださるALASのAlberto L. Bialakowsky 会長とAASの Alicia Itati Palermo 会長に、深くお礼申し上げます。

それでは、2012年ISAフォーラムの主な議題をご紹介します。

- まず、最も主要な議題は、様々なRC、WG、TGの会議です。これらの会議は、プログラムの編成に反映されます。オーガナイザーは、予定されている時間枠(ガイドラインも提供されます)の範囲内で、それぞれのプログラムをできるだけ柔軟に設計するように定められます。
- ISAフォーラムの2番目に重要な議題は、公的なアクターと関係があり、また、社会学の異なる領域が貢献することのできる、社会的に重要なテーマを創り出すことです。このテーマは、RC、WG、TGに重要な考察を得る機会を提供するでしょう。フォーラムのメインテーマは研究調整委員会によって考案され、まもなく公表される予定です。
- ISAフォーラムの第3の議題は、全てのRCの代表者が出席する、リサーチ・カウンシル・ビジネスミーティングを開催することです。

厳正なプログラムを用意することについては、研究部門のISA副会長が、開催地の組織委員会(LOC)とともに責任を持ちます。

さて、2012年ISAフォーラムの重要性について、私が研究部門のISA副会長として考えていることを述べさせていただきます。

第1に、ISAフォーラムは、それぞれのRC、WG、TGが各地で会議を開くというだけでなく、RC間で、またRC、WG、NA間で、より大きな相乗効果を発揮することを助ける機会を提供すると思います。様々なセッションで起こる議論と対話は、北半球と南半球の国々の研究者間で、共同して比較研究プロジェクトを行うことを促進させるでしょう。

第2に重要な点は、ISAメンバーの参加と展望について、多様性を増加させるという点です。特に、充分な参加者のいない集団にとって比較の利用しやすい会場を選び、参加を妨げている言語の障壁に対処することが重要です。社会学者の国際的な組織として、国家の状態、地域、市民権、エスニシティ、階級、ジェンダー、知識生産・情報普及・社会学研究の消費の

流れを形づくる言語などによって、権力と特権の源泉が生じることにについては、強く注意を払わなければなりません。ブエノスアイレスでのISAフォーラムは、我々の社会的な視野を広げるということだけでなく、地域的多様性を拡張するための重要なステップです。

第3の重要な点は、若手の研究者が、国際的なシニア研究者と出会い、協力できるISAの活動への参加機会を、より多く生み出していることです。我々は、若手の研究者のために、そのような場を拡張していく必要があります。2012年ISAフォーラムでは、特にそのような、若手の研究者とシニア研究者が一緒になるように設計されたセッションが設

[6ページへつづく](#)

歴史の窓 HISTORY CORNER

ジェニファー・プラット(サセックス大学、ISA副会長・出版担当)

by Jennifer Platt, University of Sussex, Vice-President for Publications

ISAの会員なら、イザベラ Izabela Barlinska がマドリードのオフィスを運営していることはご存じのことと思う。彼女は1987年から長期にわたって事務局長を務めているが、その前は個人的にも、また仕事の上でもたびたび移動を経験している。マドリードに来る前には、ノルウェーのオスロ(1950-53)、イギリスのロンドン(1953-59)、ベルギーのルーヴァン(1959-62)、スイスのジュネーブ(1962-67)、イタリアのミラノ(1967-74)、カナダのモントリオール(1974-82)、オランダのアムステルダム(1982-86)に居住していた。これらの国のほとんどがヨーロッパであるということを付記しておくのがよいだろう。純粋な英語圏は一度だけ、フランス語はISAの当初よりの公用語のひとつであるが、フランスに居住したことはない。ただし、フランス語圏は3か国を順番にまわっている。これまでのところ、事務局長はオフィスがおかれる国の出身者が担当してきた。地域の選択はそこで得られる利便性に負うところが大きい。すなわち、有力な候補と制度的な支援と設備である。常設の事務局と職員が設置されたことによって、ISAが現在受け持っている多数の会員と活動を支援することができるより専門的な行政が可能になった。以前の事務局長は研究職につきながらパートタイムでISAの仕事をしていたので、2、3人でチームを組んで業務にあたっていた。その多くが学術的にもすぐれた業績をあげている。そのうちもっとも著名なのは1950年代に事務局で活躍したStein Rokkan(その後1966～1970年にISAの副会長を務めた)とTom Bottomore(1974～1978年に会長を務めた)だろう。その他の人々は理事会のメンバーとして活躍した。ただし、事務局長の職についているあいだは理事会のメンバーになることを規約が禁じている。



マドリードのISAスタッフたち(左から右へ):
Juan Lejarraga, Melanie Bloem, Izabela Barlinska,
Jose Reguera.

現在までの歴史をまとめるにあたって、現在のチームについて説明しよう。ポーランド生まれのIzabela BarlinskaはISAと長い関係をもっている。1978年のウプサラ大会のときには学生協力員として働き、その後、1982年の大会を組織する際に事務局に加わった。事務局がアムステルダムに移ったときに副事務局長に、マドリードに移ったときに事務局長に就任する(マドリードで政治学と社会学の博士号を取得した)。彼女の現在の同僚はJosé Reguera(1990年からISAで働き、現在はデータベースとウェブサイトを担当している)と、Juan Lejarraga(José Regueraとともに、会費徴収と住所管理を担当している)、そして、チームに加わったばかりで事務局のさまざまな仕事を学んでいるMelanie Bloemである。

(池田和弘訳)

矢澤修次郎 SHUJIRO YAZAWA

(つづき)

矢澤：一方にパーソンズを中心にした構造機能主義があり、その対極にマルクス主義があり、その中間にウェーバー、ジンメル、デュルケムの社会学がありました。この時代、構造機能主義とマルクス主義とは、社会を全体として把握することのできる理論として若い社会学者に大きな影響力を持っていたと思います。そのころはまだ、大学において日本共産党がそれなりの影響力を持っていたから、マルク



思索にふける矢澤修次郎教授

ス主義の主流はソヴィエト・マルクス主義でしたが、その他のマルクス主義も活発で、すでにアントニオ・グラムシの翻訳もかなり揃っていました。西欧マルクス主義も広範に議論されていたことは、私の研究生活に大いに役立ちました。1973年にアメリカ最初のグラムシ・シンポが開催されたわけですが、そこで行われた議論は、私は大方マスターしていましたから。

ブラウオイ：社会学で PhD も取られたのですか？

矢澤：残念ながら、当時の日本の大学院では、ドクターコースに入ることは必要だったのですが、そこで博士論文を書く習慣はありませんでした。ドクターは、学者人生のかなり後の段階で取るのが一般的だったのです。大部分の研究者は、マスターを取り、博士課程の単位を修得してから、就職していきました。私の場合も同様です。私は修士論文では、アメリカ社会学とプラグマティズムの関係を検討しました。日本は、明治維新以降、欧米から沢山のものを学んだわけですが、その結果として帝国主義に手を染めてしまいました。私はその過ちは二度と繰り返してはならないと考えました。そのためには、プラグマティズムがアメリカ帝国主義を越えることができていないのは何故か、それを考えなければならぬと考えました。主にジェームス、デューイ、ミード、パースを検討し、また C. W. ミルズを俎上に乗せました。指導教官は富永健一先生です。ゼミでパーソンズを読んでいましたから、プラグマティズムとパーソンズ社会学との異同なども視野に入れました。

ブラウオイ：それでは、あなたはアメリカ社会学に深く慣れ親しんだのですね。

矢澤：はい、そうです。修士を終えてしばらくして、私はアメリカのセントルイスにあるワシントン大学で3年間過ごしました。当時フルブライト奨学金をもらったので、比較的自由にいろいろなセミナーや講義に参加しました。批判的 sociology を勉強したのですが、それと社会との関係を理解したくて、ある種の社会運動にも参加しました。当時は、メキシコ系の農業労働者の運動が盛んだったので、その農業労働者を支

援する運動に参加しましたし、また労働組合運動を普通の労働者の手に取り戻すことを意図したランク・アンド・ファイル労働運動をも支援しました。当該の社会と社会学を深く理解するためには、社会運動を通して理解することが必要不可欠だと考えたからです。

ブラウオイ：あなたはまた、偉大なるラディカル社会学者アルヴィン・グールドナーとも親交をむすんだんですね。

矢澤：はい、そうです。私の見たグールドナーさんは、良き家庭人としてのグールドナー、知識人の討議グループを作ろうとするグールドナーでした。実践の人ではありませんでした。セミナーでは、如何にして博士論文を書くかを、実際に彼が書いた本(『山猫ストライキ』『産業における官僚制』など)に基づいて解説し、参加者各自の論文を指導するというものでした。

ブラウオイ：セントルイスから帰られて、あなたのラディカル社会学はどうになりましたか。

矢澤：帰国した時には、60年代の運動の熱気は既に失われていたもので、社会学を直接実践に結びつける道は見出すことはできませんでした。学んだことを、沢山の論文や本にただけです。勿論、大学での教育活動にも力を入れました。津田塾大学、法政大学、一橋大学で教鞭をとり、多くの大学教員、研究者を育てました。幸いにして、海外で活躍している研究者、大学関係専門職従事者も何人かいます。

ブラウオイ：あなたは、ご自分を依然としてラディカルだと考えていますか？

矢澤：はい。私はなんとか帝国システムに反対しようとしています。また自分自身、何の変哲もない普通のランク・アンド・ファイル社会学者だと思っています。

ブラウオイ：アメリカは依然として強固な帝国だとお考えですか？

矢澤：はい、そう思います。帝国主義の形態は変化していますが、帝国主義が帝国に変化しただけで、依然として世界のヘゲモニーを握っています。しかし私は、アメリカの良い側面も認めています。アメリカ革命の伝統に則り、民衆が自分たちの手で国家をコントロールしようとする側面は、評価できると思います。メイン・ストリームの政治家や社会科学は、問題が多いと思いますが。

ブラウオイ：あなたは日本が帝国主義的国家だとお考えですか？

矢澤：ある意味では、そうだと考えています。第二次世界大戦後の日本の重要課題の一つは、帝国主義を克服することだったと思います。しかしそれは、不十分にしか果たされませんでした。課題は今でも課題であり続けています。日本は、植民地も帝国も持っていませんが、ある種の帝国主義的国家でしょう。日本では、アジアにおける日本のヘゲモニーを、依然として無意識のうちに前提にしているように思います。ごく普通の日本人の生活から判断すると、日本人は依然として外国人とコミュニケーションをすることに困難を感じていますし、とりわけ中国や中国人の現代化に対するアグレッシブな態度に大変批判的です。中国が強くなってゆくのにある種の脅威を感じているようにも見えます。こうした感情は理解することはできるのですが、その背後に東アジアにおける日本の優位性が前提としてあると考えると、問題を孕んでいると考えなければなりません。

ブラウオイ：それはナショナリズムの表れではありませんか？

矢澤：私はナショナリズム以上のものを感じています。日本の一部には、戦前の天皇制に体现されているような、「伝統的な」日本文化なしには、人間形成、社会統合が不可能だという考えが根強く残っていま

[7ページへつづく](#)

ブエノスアイレスのタンゴ LET'S TANGO IN BUENOS AIRES

(つづき)

けられることを望みます。

第4の重要な点は、社会学者と社会活動家の間のよりよい架け橋をつくることです。ローカルなレベルでの、また、国家レベル、超国家レベル、世界的なレベルでの政策と実践を知らせる厳正な研究を通じて社会正義を促進していくことによって、それは可能になります。我々が生きる現代は、社会学者に対して、社会学に基づきながらも、別種の訓練が要求されるような研究に参加することが求められています。貧困、不平等な教育機会、世界規模の不平等、環境問題、民主主義の頹廃と人権侵害などの問題は、ISAが挑戦し、解決に向けて取り組むことのできる問題の例です。そして、これらの問題に強く取り組むほど、社会学

と公共性のつながりは、より強くなっていきます。

ここでもう一度繰り返しましょう。ISAフォーラムは、国際的な問題に率先して取り組んでいる社会学者たちに、優れた土台を与え、刻々と変化していく状況に、ともに取り組むことができるのです。

2012年ISAフォーラムの開催地としてブエノスアイレスが選ばれたことは、わくわくする第一歩だと言えます。しかし、開催までの1年半の間には、やらねばならないことが数多くあります。

ISAの新しい可能性を開いたこの開催地選択のために努力し、お骨折りをいただいた全ての方に感謝します。ISA会長のMichael Burawoy 氏、研究調整委員会、ISA役員会の方々には、公平なセクションを行うために協力してくださったことを、深くお礼申しあげ

ます。事務手続きに必要な書類の準備や、公募の調整に協力してくれたイザベラ Izabela Barlinska には、特に深く感謝します。

フォーラムの可能性は限らないものです。その成功は、知的に優れたプログラムを作成することだけにあるのではなく、社会学者の国際的な組織として、社会問題に取り組む政策立案者やコミュニティ活動家、一般市民と時間を共有することにあると言えるでしょう。

(姫野宏輔訳)

フレッシュ・キドニー FRESH KIDNEYS

(つづき)

コスモポリタン化された身体、風景、大陸、人種、階級、国家そして宗教においては、すべてが融合する。ムスリムの腎臓がキリスト教徒の血液中の老廃物を濾過する。白人の人種差別主義者が、ひとつかそれ以上の数の黒人の肺の助けを借りて呼吸する。金髪のマネージャーが、アフリカ系ストリート・チルドレンの眼を通して、世界をじっと見つめる。世俗の億万長者が、ブラジルのスラム街で暮らしていたプロテスタント教徒の売春婦から切り取った肝臓のおかげで生き永らえる。富める者たちの身体は、パッチワーク化された絨毯のようになる。一方、貧しい者は現実的もしくは潜在的に、片目で、腎臓が片方だけの部分交換用の倉庫状態になるが、「彼ら自身の自由意思によって」もしくは「彼ら自身の良心に従って」起こったこととされる。そしてこの点は、裕福な病人たちがしきりに自らを再確認する点である。自分たちの臓器を少しずつ売買することが、彼らの生命保険となっている。そのプロセスの反対側では、身政治的な「世界市民」——白人で男性の身体を持ち、健康かもしくは肥満であり、インド人かムスリムの眼を持っている、など——が出現している。一般的に、生体腎の流通は、南から北へ、貧しい身体から富める身体へ、黒や褐色の身体から白い身体へ、女性から男性へ、もしくは貧しい男性から富める者へ、というように確立された資本の経路に従っているのである。女性は、世界中どこであっても臓器売買による受益者となることはめったにない。このように、コスモポリタン化の時代は、臓器の販売国家と臓器の購入国家へと分けられて再結合されるのである。

コスモポリタン化の時代は、良かれ悪しかれ、私たちすべてが分かちあう世界、そしてそれはもはや「外部がない」「出口がない」「他者のいない」世界を意味する。私たちは、「北

の語り」をどんなに的確で痛烈に批判しようが「南の語り」を無視しようが、このリスク社会(Beck 2009)——その支配力の影響下にあるだけでなく、自らを危機に晒すこと、崩壊、苦痛、搾取によって汚染された社会——において、これらの言説が混交し矛盾するフレームや状況と共に生きること運命づけられているのだと認識しなくてはならない。人すべてを部外者のままにとどめてしまうような自律の夢は、すべて捨て去ろう！そして、社会科



臓器移植

——コスモポリタン化のシンボルとして——

学において「南の声」と「北の声」を明確に区別する「地理に基づく人種差別」もすべて捨て去ろう！

これは「北の語り」であろうか。それとも「南の語り」なのだろうか。いや、その両方である。そして、これらの相反する視点を社会学的分析のレベルで体系的に組み合わせる方法を探すが、「方法論的コスモポリタニズム」が意味することなのである。

「フレッシュ・キドニー」の場合は例外なのだろうか。そうではない。コスモポリタン化のプロセスは、例えば家族、世帯、階級、労働環境と労働市場、学校、村落、都市、科学、市民

的社会的運動、そして一神教宗教組織といったような、世界中すべての種類の中間制度に対して根本的に影響を与え、変化させる。それらは、増加傾向にある人口のディアスポラ性が国家もしくは国家に類似したものの境界内に収まっているような、多心性を持った世界に存在している。コスモポリタン化のプロセスは、気候変動や世界同時金融リスクといった現象も含む。例えば、コスモポリタン化された「グローバル家族」は、長距離間における親密性というパラドクスと世界の矛盾の両方を体現している。この矛盾は、このような家族によって実践されている。二重国籍に関わる結婚、両親、カップルがおり、それらが二国間やある国内におけるマジョリティ/マイノリティ・コミュニティ間の緊張を表す可能性がある一方で、移民家族は中心層/周辺層の間の緊張を取り込む可能性がある。グローバル家族と長距離間における親密性は、因習的な知恵を再考させ、「遠く離れた愛情」についての力強く新しい語りとその矛盾に備えるきっかけとなる。それは、国家によってプログラム化され、法に盛り込まれてきた無知の状態を映し出している。そして、遠く離れた愛情とグローバル家族は、文化的な苦痛——帝国主義の歴史に端を発するグローバル・レベルでの不平等が今日まで続いているという激怒・憤怒——に耐えて戦うという設定になる。

そして、母性のコスモポリタン化も同様に存在している。医療補助を受けた生殖技術は、新たな、そして勇敢な選択肢(言葉に表しようがない!)のある世界の扉を開いた。そして「卵子提供母」や「代理母」という選択肢を当てはめると、「私の母親はスペイン人の卵子提供者でした」や「私の母親はインド人の代理母でした」ということになる。このように、生物科学的操作によって、グローバル・レベルでの不平等は、人間の身体とアイデンティティに組み込まれているのである。

矢澤修次郎 SHUJIRO YAZAWA

(つづき)

す。政治的には、自由民主党の議員にも、そうした考えの人が少なからずいるようです。この考えは、日本人の、とりわけ古い世代の人々の無意識のなかにあると言えるでしょう。今現在は、グローバル化の中で、これまで日本の発展の基盤となってきた家原則、共同体原則、組織原則、さらには日本イデオロギーなどが機能しなくなっています。新しい基盤を作らなければならないのですが、グローバル化がもたらしたこの危機に乗じて、戦後の民主化を覆す動きが強まる可能性さえあります。だから社会学は、研究を通じて日本社会の新たな方向を指し示し、新たな社会的デザインを提示する大きな責任があると思います。

ブラウオイ：あなたは、多年にわたって、国際社会学会の活動に熱心に参加してきたと伺いましたが、それは本当ですか？

矢澤： はい。私は1982年メキシコ大会以来、すべての世界社会学会議に参加してきました。82年のプレナリーセッションに参加して以来ずっと休まず参加しています。日本は国際社会学会と特別な関係を持っています。私の東京大学における指導教員の一人である尾高

邦雄教授は、国際社会学会の創立メンバーの一人でした。彼はリベラルな人でしたから、戦争中の軍部の統制には我慢がなかったのでしょう。戦後彼は、国際学会で活躍しました。その後彼の活動を継承したのは、綿貫謙治教授です。彼はカルドーゾ会長の下で国際社会学会の副会長を務めました。私は、綿貫教授の功績を受け継いでいるとも言えます。

ブラウオイ：この30年間で国際社会学会はどう変わったと思いますか？

矢澤：かなり変化してきましたね。国際社会学会は、3つの柱を持つユニークな組織ですね。一つの柱は、研究委員会です。もう一つの柱は、各国の社会学会です。そして第三の柱は、個人ということになります。1989年代までは研究委員会が大きな力をもってきました。しかし90年代以降、各国社会学会のインプットが強くなってきました。これは良い方向だと思います。しかしまだ研究委員会でもない各国社会学会でもない個人の機能と権利に関しては、議論の余地を残しているように思います。いずれにしろ国際社会学会は、真の意味でのグローバルな社会学を創造する関心と能力をもったほとんど唯一の国際組織だと思います。そのことに留意して、私たちは力を合わせて組織的知性を作り上げていかなければならないと思います。

(矢澤修次郎補記)

コスモポリタニズムからパブリック・ソシオロジーへ FROM COSMOPOLITANISM TO PUBLIC SOCIOLOGY

(つづき)

化は異なっていたとしても、若者や女性や母親たちが同じような経験をしていることに目を向ける。都市社会においては、若者や女性や母親は、異なる文化を持つ他者とともに暮らしていく方法を見つけ出す必要がある。実践的な場面では、コスモポリタニズムとは交渉することを意味する。共通性と異質性とのあいだで妥協点を探りながら継続的に交渉するのである。この交渉のプロセスは、決して和やかなものではない。小競り合いや論争があり、多くのエネルギーを消耗するものである。

筆者が住んでいるフランクフルト市を例に挙げると、昨年一年間は都市政策の方向性を変えるための準備期間であり、フランクフルト市の統合委員(Integration Commissioner)であるNargess Eskandari-Grünbergは、統合と多様性という新しい概念を導入した。これらの概念は、各地で行われた何百ものミーティングや討論会で議論の対象となった概念である。これらの討論会は、性別、年齢、宗教、所属階層、民族が異なる人びとができるだけ多く参加できるようにインターネット上で開催され、2010年10月末までに47,000人が参加した。これらの討論会の目的は、どのようにして移民やその子孫を分離する政治的伝統から距離を置き、多様なライフスタイルを持つ個々人の文化的要請に着目するかについて、人びとに対話を促すことであった。筆者の知る限り、このような取り組みを行っているのはドイツだけであり、人びとの意見に耳を傾け、多様性を認め、ときには旧来的な市民の考え方に挑戦することについて、政治家たちは多くの人びとから賛同を得た。

しかし、フランクフルトは他のドイツの都市の影響をまったく受けないわけではない。2010年の夏、ドイツ中央銀行の評議委員会の著名なメンバーであるティロ・ザラツィンThilo Sarrazinが出版したGerman does itself inという本がきっかけとなってある論争が始まった。この本の中で、ザラツィンSarrazinは、ドイツの生活保護受給者とムスリムは犯罪者であると主張し、ドイツの「民族性Volk」がすっかり失われてしまったドイツの将来像を描き出した。アフリカ系アメリカ人の社会問題は、彼らの遺伝子に由来すると主張した悪名高いThe Bell Curveの著者と同様に、ザラツィンはドイツで周辺的な位置に置かれている人びとのあいだに見られる文化的な腐敗には遺伝的基盤があると指摘した。これら2冊の本はともに、幅広い研究から得られた

統計データを用いることで、本来は不完全である彼らの見解が純粋に科学的な根拠によって裏付けられている、と主張している。

ザラツィンの主張は目新しいものではないけれども、その本はドイツにおけるコミュニケーションの風潮に対してきわめて大きな影響を及ぼした。ザラツィンは、国家レベルまたは地域レベルでの政治的な議論の中心に飛び込んでいくことが可能であった。彼の本は100万部以上を売り上げるベストセラーとなった。彼の主張はカフェや街頭で議論的となり、村落においても都市においても関心が持たれた。ザラツィンの本の宣伝と議論の普及に対して、メディアは大きな役割を果たした。社会民主黨員の一員であり、ベルリンの前財務大臣であつ

“ ...Sarrazin paints a future dominated by the extinction of the German Volk...”

”

ザラツィンは、ドイツの「民族性Volk」がすっかり失われてしまったドイツの将来像を描き出した。

たザラツィンは、「公共の福祉に貢献する知識人」の仲間入りを果たしたかのように振る舞っており、「真実を語ること」や「政治的正当性と移民問題、特にトルコやアラブ諸国からの移民の問題に関するタブーへの挑戦」を恐れないかのようにであった。

上記の論争以外にも、関連するものとして以下のような考え方に關する議論があった。

- 政治家や政府と一般市民のあいだには距離がありすぎる。政府は多数派の市民の承諾を得ることなしに意志決定をしてしまう。政府は人びとが本当に心配している事柄について考慮していない。
- ドイツは文化的に同質性の高い社会であり、イスラムは脅威である。

マルチ・バーサリズム(多元的普遍主義): 新しいパラダイムか? MULTI-VERSALISM: A NEW PARADIGM?

サリ・ハナフィ (ISA理事、 ベイルート・アメリカン大学)
by Sari Hanafi, American University of Beirut, ISA Executive
Committee

ユネスコの中南米の高等教育のための国際機関International Institute for Higher Education in Latin America and the Caribbean (IESALC)やアルゼンチン学術会議Science Council of Argentina (CONICET)の協力の下、新たに設立された「世界社会科学・人文科学ネットワークWorld Social Sciences and Humanities Network (World SSN Net)」は、「社会科学や学術領域の仕事における文化的要素—学問上のマルチ・バーサリズムを作ることへの認識論的・教育的な挑戦」と題した3日間のワークショップ(2010年10月28~30日)を開催した。社会学者、人類学者、歴史学者、生物学者などが世界中からブエノスアイレスに集まり、知の生産のされ方の多くを不可視なものにしてしまう、排他性の構造がある状況の中で、「全世界的に知識を分かち合うことがますます必要になっていること」を課題として討議した。

マルチ・バーサリズムは、南半球の科学者を沈黙させるユニ・バーサリズム(普遍主義)に対抗するものである。マルチ・バーサリズムは、ユニバーサリズムの限界を考える一つの方法である。それはオリエン

タリズムに対抗するオキシデンタリズムではなく、北半球と南半球の研究者間での対話や異文化間翻訳を考える一つの方法である。マルチ・バーサリズムは、構造依存性を認識しているが、同時に、依存性と闘うための方法論を発展させるものである。社会科学の国際化を了解した上で、ワークショップの参加者は、この国際化がいかに文化に敏感なものであり、その土地固有の知をも含む、知のいろいろな源泉があることを認識することに専心していた。

“

...Multi-versalism is a way of
thinking the limitations of uni-
versalism...

”

マルチ・バーサリズムは、ユニバーサリズムの限界を考える一つの方法である。

開会の辞で、Michael Kuhn(World SSN Net会長)は、西洋的な世界の解釈であるユニバーサリズムを、全世界の多様な解釈に置き換える必要があることに焦点を当てた。彼は、そのプレゼンテーションにおいて、西洋的思想の優位性の性質やメカニズムの分析を行い、World SSN Netが今後やるべきこととして、1)社会科学的知の認識論的前提を明らかにすること、2)政治色の強いカテゴリーや理論に立脚した社会モデルの軌跡をたどること、3)政治色の強い知の排他主義から社会科学を解放するものとしての社会科学的思考を世界的に発展させることを挙げた。

[9ページへつづく](#)

コスモポリタニズムからパブリック・ソシオロジーへ FROM COSMOPOLITANISM TO PUBLIC SOCIOLOGY (つづき)

- ドイツは移民の国ではない。移民が流入して来るのは一時的な現象であるべきであり、移民が定住することはドイツ社会の連帯と国家のアイデンティティにとって大きな問題である。

多くの知識人や政治家はザラツィンを支持した。ただし、それはザラツィンの遺伝子に関する議論への支持ではなく、移民に関する議論を制限することには政治的正当性があり、多文化主義は左翼のキメラ的思想にすぎず、移民、特にムスリムは問題を引き起こす、という彼の考え方に対する支持であった。知識人や政治家たちの支持は、ザラツィンの本を過剰に評価することにつながった。しかし、その一方で、このような考え方に反対する政治家や知識人も存在した。社会民主党はザラツィンを離党させる手続きをとり、ドイツ銀行も評議員から外れるようにザラツィンに圧力をかけた。しかし、もう一方では、権力のある政治家や有名なフェミニスト、科学者や芸術家たちがイスラムバッシングに支持を表明した。最後には、移民やムスリムに対して肯定的または否定的な立場の双方で、様々な意見や利害関係が複雑に絡み合い、全体的な雰囲気は敵対的なものとなった。そして肯定と否定の両者の意見はますます硬直的なものとなってしまった。このような状況で極右政党は力を増し、移民に関する議論を合理的な視点から押し進める機会はほとんど無くなってしまった。ザラツィンの分析に疑義を呈する人びとは、ザラツィンの主張とは矛盾する様々な研究結果を示したが、それは無益な戦いであった。敵対的な雰囲気は、もはや「覆水盆に返らず」という様相であったのである。

このような事実は、フランクフルトにおける多様性に関する議論にとってどのような意味を持つだろうか。社会学にとって上記の論争は非常に興味深いものである。上記の論争からは、数多くの新たなリサーチクエストが生み出される。これらのリサーチクエストに解答するためには、論争に関与した様々な政党を観察し、新聞記事を分析し、メディアにおける論争を描写し、そしてザラツィンの本の後遺症に対して「バランスのとれた」論文や本を書こうという考えを持つこと

が必要である。それはまさにマックス・ヴェーバーが「専門職としての社会学」と呼んだ作業である。これは科学を政治から分離し、「価値自由」な記述にこだわり続ける作業でもある。しかし、このような社会学に対しては、かつてはラディカル・ソシオロジーと呼ばれ、現在はパブリック・ソシオロジーと呼ばれているものによって「下から」すなわち、市民社会とその担い手である市民の観点から、異議が唱えられている。パブリック・ソシオロジーの観点からは—アドルノや他のフランクフルト学派の研究者がその先駆者だと考えられているが—、開放的でお互いを尊重したコミュニケーションを脅かすような論争、特に人びとを扇動して特定の集団をスケープゴートにするような議論に対しては、社会学の側から介入していくことが重要であるとされている。

したがって、スケープゴートにされかねない「無口な」集団のために場所を空けることが重要である。彼らは移民としての背景を持っていることもあれば、そうでないこともあるだろうし、我々と職場を共有したり、学校や大学で一緒にスポーツをしたり勉強したりしていることもあるだろう。あるいは、国際結婚した家族の一員として接することもあるだろう。大学や市はある共通した関心を持つと考えられる。つまり、お互いを尊重し合い、学生たちが彼らの能力を高めることができる雰囲気を作り出したいならば、われわれは公的な議論に参加する必要がある。このような議論から、学生たちは様々な形で影響を受けるだろう。したがって、筆者の願いは対話を促すことであり、「いかにして恐れを持たずに異質なものと共存するか」というアドルノの問いをコスモポリタニズムに関する議論のモットーとしたい。この議論には、学生や教師や教授や銀行の役員や政治家やタクシーの運転手など多くの人びとが参加することが望まれる。これはとても困難な作業であるかもしれないが、まったくの夢物語に過ぎないわけでもない。このような議論は、どんな形であれ人びとのあいだの敵意を沈静化し、下からのコスモポリタニズムを実現することに繋がっていくであろう。

(塩谷芳也訳)

マルチ・バーサリズム MULTI-VERSALISM

(つづき)

ワークショップ自体は、高尚な理論的議論にこだわっていたわけではなく、現実に着地した事例研究を扱った。Hebe Vessuri(ベネズエラ科学研究所)は、参加者に、「科学」の文化から「研究」の文化への移行という観点から、議論を組み立てるよう促した。Bruno Latourに従って、彼女は、科学は冷徹で、真っすぐで、客観的なものであるのに対し、研究は、温かみがあり、関係的(関与的)で、リスクを伴うものとした。科学は、人々の論争の予測のつかなさで終止符を打つものであるが、研究は論争をつくりだすものである。また、科学は、イデオロギー、情熱、感情の束縛から逃れようとする中で、客観性をつくりだすものであるとした。Vessuriにとって、今日の研究と社会は、もはや別々には分けられないという点で密接にからまっている。彼女によると、社会科学的研究もまた、いくつかの興味深い変化を経験している。今日では、対話、比較、翻訳がいわば合言葉である。

出席者からは、人間の経験が多様であることを認識する重要性についての主張があった。Chris Caswill(オックスフォード大学)は、Charles Lindblom(米国)、Bent Flyvbjerg(デンマーク)、Catherine Odora Hoppers(南アフリカ)といった3大陸からの発言をもとに、彼が呼ぶところの「社会科学の実践と日常的な知」を理論化した。それぞれの発言は、社会科学的研究の諸実践間の相互関係に関わるもの、研究が生成する知に関するもの、研究によって生まれた知の活用に関するものだった。

他の出席者たちは、フィールドワークに基づいた事例研究を提供した。Han Sang-Jin(ソウル国立大学)は、韓国社会を研究する際、Beckの「リスク社会」概念が、韓国の文化伝統のボトムアップ的な解釈をどのように提供するかの好例を示した。韓国が直面するリスクは、急速に近代化する社会での道徳構造の崩壊と関連があり、この文脈では、研究者は、儒教のもつ規範的な基礎にこそ注目すべきであるとした。

Nestor T. Castro(フィリピン大学)は、フィリピンの教育制度が、フィリピンの実態に必ずしも適合しない西洋的概念に特権を与えていると論じた。たとえば社会心理学では、生徒は「他者」との対比で「自己」概念を教えられるが、では、互いに補い合う一対、すなわち他者への連帯の価値に注意をむける「他者のなかでの自己」をほぼ意味するタガログ語の“kapwa”という言葉はどうやって説明できるのか。彼はそれゆえ、社会科学の教育の際には、社会科学の概念は西洋と東洋といった多様な源泉から生じるという、マルチ・バーサリズムのやり方を主張する。西洋科学の優位性は、日本人研究者が外国の研究者と、特に学問的な討議で意見が異なる場面で意思疎通する際に直面する困難を研究した、Kazumi Okamoto(Knowwhy世界研究所)によっても議論された。同様に問題のある優位性として、Tania Pérez Bustos(コロンビア国立高等研究所)は、科学・技術の教育における男性優位の前提を強調した。Nese Karahasan(アンカラ大学)は、トルコでここ20年以上にわたって、文化的な要素が、いかに社会学の学問研究に影響を与えてきたかを報告した。I Ketut Ardhana(バリ島ウダヤナ大学)は、インドネシアの文化研究について発表し、Carmen Bueno Castellanos(メキシコIberoamericana Ciudad de México大学)は、メキシコの人類学が扱う領域について論じた。Castellanosは、南北間、また一方での学問の世界と他方でのNGO、ビジネス、国際機関などとの間の、より公平な協働を促した。

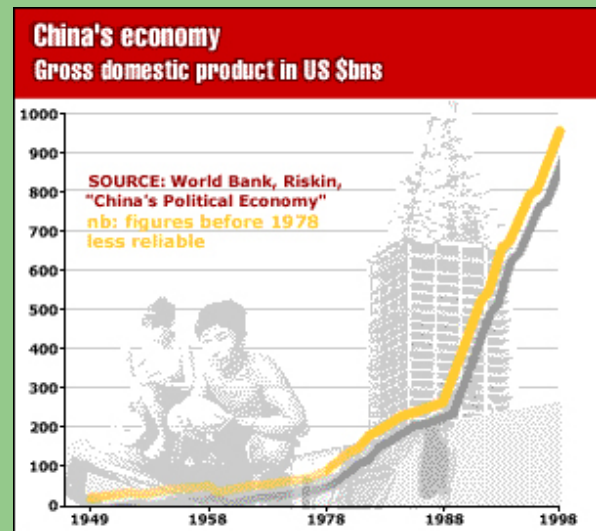
中国社会学は急速な経済発展という 挑戦に直面している

CHINESE SOCIOLOGY FACES THE CHALLENGE OF RAPID ECONOMIC DEVELOPMENT

李培林 (中国社会学学会会長)

by Peilin Li, President of the Chinese Sociological Association

2010年度の中国社会学学会大会における中心的議題として、「中国の道と社会発展」が掲げられていることは、象徴的な意義を持っている。改革開放政策以来、30年が経過した。その間、中国は政治的動乱、経済的変動、SARS、地震災害、そしてグローバル経済の危機を経験してきた。しかしながら、われわれの経済と社会は高度成長と急速な発展の両方を維持してきた。そして「中国の道」、「中国モデル」さらには「中国の経験」を推し進めてきたのである。今年はハルビンにおいて開催されるわれわれの年次大会に、全国の約30の省や市、そして他のアジア諸国から600人を超える社会学者が出席する予定である。この年次大会に加えて、23の特定のフォーラムが開催される。中国社会学は、参加者やフォーラムのスケールからみても、急速な拡大の時代にあるように見られる。



中国の急激な経済成長

近年のグローバル経済の危機とヨーロッパ諸国における高額な政府債務は、国際的な発展を複雑にした。一方でグローバル社会経済と科学技術の急速な発展、そして異なる国家・地域間における経済的な相互作用と相互依存性が増大している。また他方で、人類は資源、環境、不均等の発展、地域紛争、金融上の安全対策といったさまざまな新しい挑戦に直面している。どのようにして平和と発展を、このような複雑で変化しやすい環境の中で維持していくことができるのか、そして国際社会の秩序をいかに維持していくことができるのか。こうしたことは、われわれの時代において重要で現実的な問いである。

われわれの国家の社会経済的成長は、グローバル経済の危機の後、発展の新しい段階に入った。この新しい発展段階において、発展モデルを改革すること、都市と農村の分業問題を解決すること、地域発展を調整すること、社会建設を早めることが、さらなる発展にとって、ますます重要な問題になってきている。中国は現在、12度目の五カ年計画を作成中である。次の5年間は、2020年

中国社会学 CHINESE SOCIOLOGY (つづき)

における協調的な社会(Xiokang Society:小康社会)を実現するという目的を最終的に確かなものにするための、発展の本質的な時期となる。

改革開放の30年の間、中国の社会学は急速な、かつてなかったような発展時代に突入した。30年以上に渡り、中国経済の拡大とその社会構造の変容が中国社会学の発展にとって肥沃な土を提供してきた。その間、同様に、中国社会学は中国の協調的な発展に貢献してきたことができる。この歴史的な過程のなかで、社会学者は社会現象を慎重に観察し分析してきた。また重要な社会問題を提起し、それに答え、そして学術的知識を持続的に蓄積してきた。つまり、社会科学における社会学の重要性を打ち立ててきたのである。

急速な経済的発展は、資源の浪費や環境の悪化、収入の格差の増大、そして重い地域負債といった様々な問題を導いた。また、義務教育、労働者の保護、社会福祉、医療、そして都市と過疎地の発展に対する調整といった、中国社会が未だ促進させることができていない多くの側面がある。

本年度中に、いくつかの大学キャンパスや幼稚園において、社会に対する抵抗としての無差別殺傷事件が起こり、大規模な労働者によるストライキが起こり、そして同じ企業に勤める労働者が集団で自殺

をはかるといった事件が起こった。社会学者はこれらの問題に深い注意を払わなければならない。

国家の急速な発展の中、中国社会学は国際的社会学からますます多くの注目を受けている。われわれはアメリカ、フランス、ロシア、ブラジル、インド、日本、そして韓国における社会学と協調的な関係を作り上げてきた。また、われわれは日本と韓国、そしてブリックス・フォーラム(ブラジル、ロシア、インド、中国により構成されたフォーラム)とともに、東アジアフォーラムを開催してきた。中国社会学は国際的にますます強い影響力を及ぼし始めているのである。

来賓と研究者の皆さま、中国社会学は大きなチャンスに直面しています。そして、おそらく次の10年には世代交代に直面していくでしょう。私は、みなさんが共に働く機会を捉え、改革と発展に伴う重要な主題を研究し、若い世代の社会学者が成長するように助け合い、深く、思慮深い社会調査を企て、そして社会学史に関わるより良い仕事を残すことを望んでいます。ここに、私は、中国社会学の2010年度大会の開会を宣言します。

(速水奈名子訳)

注)本稿は、2010年7月24日に中国Harbin市にて開催された中国社会学会年次大会の開会スピーチの要約である。

組織犯罪と国連 ORGANIZED CRIME AT THE UN

ルドルフ・リヒター

(ウィーン大学、在ウィーン国連事務所・ISA代表)

by Rudolf Richter, University of Vienna, ISA Representative to the UN Office in Vienna

私はオブザーバーとして第5回「国境を越えた組織犯罪に対する国連協定の当事国による会議」のセッションに参加した。それは2010年10月18日から22日まで、オーストリアのウィーンにおいて開催された。その会議は、国際的な組織犯罪と闘うための協定を施行することについて報告するための、当事国の機会として設立された。

経済的問題としては、国境を越えた犯罪というのは巨額の資金の流れに責任を負うものである。声明の導入部で、報告者は、世界で毎分200,000ドルが違法売買によって稼がれていると語った。したがって、それは世界中の国家にとって重要な問題であり、会議は大使や国家の大臣による一般的なディベートから開始された。組織犯罪と闘うことにたいする一般的な取り組みが確立され、そして国際協力の重要性が協調された。闘いの一つの指標は銀行口座の開示をめぐる犯罪を阻止することである。

個別のセッションではそれぞれ以下の項目が検討された:

- 国境を越えた犯罪にたいする国連協定の批准の再検討
- 個人の違法売買に関する議定書
- 移民の不法入国に関する議定書
- 小火器に関する議定書

ここには、多様で複雑な構図が描かれている。難民を助け、移住というものが人間存在の改善に資する時には、違法売買にもいくらか良い点があると議論されている。同じように、そのような移住は合法的な経路を伝って可能になるべきだと議論されている。犯罪者にとって移民の密輸入は、低いリスクで高い利益をもたらすビジネスである。国際的なコミュニティは、これをリスクの高い事業にしようとしている。それ

とは対照的に、小火器の違法売買はつねに悪い面ばかりをもつ。サイバー犯罪や臓器の違法売買といった、国境を越えた犯罪の新しい取引は、この協定のなかに組み入れられる必要がある。

本セッションでは、組織犯罪の評価について協議された。それは国際的に選ばれた人員によって監視され、データーによって支持されるべきである。ほとんどの国において、評価を実行すること、そして具体



違法取引される人々

的な活動と目標達成を示すことが急がれている。他のいくつかの国は早急な実施に取り組んでいくことに消極的で、また資金調達について問題を抱えている。資金援助が不可欠であり、北から南へと、資金援助をはじめていくべきである。

参加者全員が、データを収集し、薬物と犯罪に関する国連事務局の専門的チームによって確立された方法に依拠することが、何かを推奨することよりもっと重要であるという見解に賛成した。

社会学と環境の変動：マレーシアからの報告

SOCIOLOGY AND ENVIRONMENTAL CHANGE: REPORT FROM MALAYSIA

ルチーラ・ガンダリー・スクレース (アジア太平洋社会学会会長)

by Ruchira Ganguly Scrase, President of the Asia Pacific Sociological Association

2010年12月、マレーシアのコタキタバルで第10回アジア太平洋社会学会大会が開催された。マレーシア大学サバ校とウーロンゴン大学の共催である。大会のテーマは「社会と環境の変動：アジア太平洋の機会と挑戦」。テーマの話題性によって本大会はメディアの注目の的となり、地元の新聞やテレビでも大きく報道された。一般的に言って、社会学者は何をしている人々かあまりよく知られていないのだが、多くの社会学者がインタビューされたことで、学問の外の世界へ社会学の重要性を強調するよい機会となった。

基調講演は、マレーシア国立大学エスニシティ研究所長のShamsul Amri Baharuddin教授、ISAの理事を務めるアテネオ・デ・マニラ大学社会学部のEmma Porio教授、サバ生まれのフィリピン映画監督であり、映像作家でもあるChris Chong Chan Fuiの3名によって行われた。Porio教授の講演「社会と環境の変動：社会学の機会と挑戦、そして社会学的実践」は大きな議論となり、学会全体の舞台を作りだすものとなった。また、これまでも著名な映画監督やジャーナリストが本学会に参加することはあったが、若い監督の受賞したドキュメンタリーが大会の中で上映されるのは初めてのことである。Chris氏のドキュメンタリー「非-場所Dis-Location」は大変好意的に受け入れられ、将来の大会においてもこのような試みを取り入れていくべきだと感じさせた。特に大学院生や若い研究者の間では、メディア社会学への関心が高くなってきている。

大会には15か国から150を超える社会学者が参加した。アジア研究をしているヨーロッパの大学からも多くの社会学者を本大会に迎えることができたこと、また多くの大学院生が大会に参加して新しいアイデアを紹介し、既存の社会学的思考に挑戦する姿が見られたことは大変喜ばしいことである。

全体として大会は成功を収め、多くの参加者に楽しんでいただくと私は感じている。総会では、博士論文を提出したばかりのNichole Georgieauさんが新しい若手研究者代表に選出され、国際イスラム大学マレーシアの社会学・人類学のPhDキャンディデートで、アルバニア国籍のBrikena Qafa-Osmanさんが院生代表に選出された。その他の理事は留任となった。

アジア太平洋社会学会では、伝統的に懇親会が大会のハイライトになる。地元のカダザン族のダンサーが参加者を魅了し、本学会の事務局長を務めるScott Baum教授がもっとも難しいダンスステップのひ

とつに参加し、その器用さにはわれわれみな大変驚いた。大会はすべての行事が滞りなく進行して大成功を収め、多くの人を楽しんでいただいた。なお、次のアジア太平洋社会学会大会は2012年を予定し、日時と開催地については現在検討しているところである。

(池田和弘訳)



APSA 大会で基調講演を行うISA理事のEmma Porio氏

組織犯罪と国連 ORGANIZED CRIME AT THE UN (つづき)

2、3のNGOはオブザーバーであることを越えて参加することが認められていたが、彼らは市民社会の視点を取り入れることの重要性を強調した。彼らは被害者中心のアプローチを促した。それは補償と物質的支援、そして自助組織の構築を提供するための尺度を設定するものであった。

社会学者にとって最も重要な問題は、データが国際的に求められていることであるように思われる。社会学者は量的、質的データを集めるために協力できるだろう。量的データは国家ごとの事例研究と同時に、個人の(運命の)事例研究によっても深められるだろう。社会学者はまた、法律家と役人の育成、市民社会組織によって組織された訓

練の在り方に貢献することができるだろう。実際にこのような活動に関わっている人、あるいはこのような活動に関心を持っていて国際的に重要な問題に取り組みたいと思っている人は、UNODCのホームページ(<http://www.unodc.org/unodc/en/ngos/news.html>)にアクセスし、もっと多くの情報を得ることができる。

(速水奈名子訳)

オーストラリア社会学会(TASA)年次大会:速報

DISPATCH FROM THE AUSTRALIAN SOCIOLOGICAL ASSOCIATION (TASA)

ダン・ウッドマン(オーストラリア国立大学)
by Dan Woodman, Australian National University

2010年12月6日から9日にかけて、シドニーのマッコーリー大学で、2010年度オーストラリア社会学会(The Australian Sociological Association : TASA)大会が開催された。



博士課程在籍のJustin Lu氏が、賞をTASA会長Michael Gilding教授から受け取った。

会議は社会学のクイズ大会から始まった。オーストラリアの社会学コミュニティの、近寄りたがたいコレクティブ・ストアのような雰囲気は、このクイズ大会によってかなり改善されたと思われる(今後のISAのイベントで、オーストラリア人の同僚と会話する時には、この話題が出てくるかもしれないのでご注意ください)。

ほぼTASAの若手研究者グループのメンバーで構成されていた私のチームは、2位という結果であった。2位が理想的だろう、というのが我々の総意だ。同僚には我々の博識ぶりをアピールしてしまったが、そんなに恐れるほどのことでもない。さらに、優勝チームと2位のチームの賞品は同じものであった(ボトルワイン4本)。これぞオーストラリア社会学の偉大な伝統、「平等主義」である。

2010年度TASA大会の開会式の基調講演を務めたのは、Syed Farid Alatas氏である。Alatas氏のプレゼンテーションは、最近TASAで開催された、Raewyn Connell氏が『『南の』社会学』と呼んだ会議での討論に基づいたものであった。Alatas氏は、非西洋の多数派世界から生まれた理論が、いかにして西洋の社会学と文学の『正典』と対話できるか、という点に焦点をあてていた。

第2基調講演を務めたのはMary Holmes氏で、出席者に対し、現代における主観的な感情の果たす役割と、自分の人生を形作るために人々が感情を利用している方法について、検討することを求めている。

最後の基調セッションは、Raewyn Connell、Jack Barbalet、Michael Gildingの3氏が

パネリストとして、「ネオリベラリズムの概念は長生きし過ぎて、その有用性を失ってしまったのではないか」という議論を特色としたものだった。このパネルディスカッションからは、「概念というものは、あまりに多くのものを説明しようとする、退屈な社会学になってしまうことがある。そして、今や概念は、現代のグローバル資本主義の特徴を正しく描写していないのかもしれない」ということが示唆された。しかしそれでも、現代の社会学者がネオリベラリズムのような概念を持っていないのであれば、適切な概念を発明する必要があるだろう、というのが、ディスカッションの総論であった。

並行して行われたセッションは活気のあるものであった。私は若手研究者の集まるセッションに出席して時を過ごしたが、多くのセッションは、あふれるほどの出席者が詰め込まれ、寛容で熱意のある議論が繰り広げられていた。他のセッションの報告書を見ても、同じように活気があり、出席者多数のセッションが多かったようだ。セッションの開始時間に遅れると、オーストラリア社会学の年長者であっても座る席がなく、入り口で立ち見をしていたほどである。もう少しシニカルな参加者は、そうした教授たちがかわいそうだからと、自分より若い同僚に席を譲らせていたようだった。

大会についての筆者の全体的な印象は、オーストラリア社会学の現在(または近い将来)の『危機』に対して関心が薄いのではないかと、いうものである。

多くの発表者は、近年のオーストラリアの社会学者が行っている社会学的な貢献について、ポジティブに考えているように思われた。この楽観主義は、現代のオーストラリア社会について、(大きな影響力がないとしても)公的な議論をしている、という自信の高まりに由来するのかもしれない。もしくは、各大学の社会学部が新たにスタッフを雇用して、過去の年度よりも人員を拡張しているということにも、関連があるのかもしれない。または、我々の学資金援助の状況が、この大会にはるばる参加した少数のイギリスの学生が直面したひどい状況ほどには、悪い状況ではなかったという安堵感なのかもしれない。

最後に一言、大学のバーは夏季休暇のために閉店中であったのに、大会は素晴らしく社交的な雰囲気のあるものだった。日中に始まった多くの会話は、夕方まで長く続いていた。キャンパスを離れて交流する場所は早々と特定されていた。午前3時ごろまで、キャンパスの近くのバーに付き合わされていた(投げ捨てられていた)15人ほどの社会学教授が

ループの物語は、TASA大会で長年語り継がれていくことだろう。

私の同僚Ani Wierengaは、悪名高い「御用学者(bouncer-boffin)」問題の連鎖を引き起こしている最優秀社会学研究賞について、賞は会議の場で与えられるようにするべきだという提案をした。

来年度の大会は、『ローカルな生活/グローバルなネットワーク』というタイトルのもと、2011年11月末にニューカッスル大学で開催される。

シドニーから海岸沿いに車で2時間ほどの場所にある、かつての産業都市ニューカッスルは、トラベルガイド『ロンリープラネット』によって、2011年「行くべき町」トップ10に選ばれたことで有名である。

我々の国際的な仲間達に、TASA大会を体験してもらえるように、そして、2011年が素晴らしい年になるように、資源の許す限り尽力していきたい。

(姫野宏輔訳)

サイエンス・サークル

——ポーランドにおける若手社会学者
のプロジェクト——

SCIENTIFIC CIRCLES:
A PROJECT OF POLISH JUNIOR
SOCIOLOGISTS

トマス・クコロヴィッツ(ワルシャワ大学)
ルーカス・スロコフスキー(ワルシャワ大学)
by Tomasz Kukolowicz, University of
Warsaw and Lukasz Srokowski, University of Wroclaw

ポーランド社会学会(Polish Sociological Association: PSA)に、「サイエンス・サークル」という部門がある。15の大学から、およそ100人の学生がその部門に所属している。「サイエンス・サークル」という部門の名前の由来は、ポーランドにおける学生が自主的に組織したところからきている。これらは、大学における義務的な研究を越えて活動することを志した学生が集って形成したグループである。学生によるサイエンス・サークル、すなわちポーランド社会学会における私たちの部門の典型的な活動とは、学生による科学会議の構成、ディスカッション、「面白い」人たちの出会い、小規模な研究プロジェクトの遂行、時に学術雑誌や著作の出版、にある。多くのプロジェクトは小規模に、いかなる資金援助をうけることもなく実現されている。

ポーランド社会学会における「サイエンス・サークル」という部門は、2004年に修士課程、博士課程の学生によって設立された。この部門の設立理念は、異なった都市から若

[14ページへつづく](#)

接続しているのは誰か —— 社会学者とグローバルなデジタル格差 ——

WHO'S CONNECTED? SOCIOLOGISTS AND THE GLOBAL DIGITAL DIVIDE

ジェニファー・シュレイディー (カルフォルニア大学バークレー校)
by Jen Schradie, University of California, Berkeley

かつて学術的な交換に使われる技術的な道具と言えば、分類カード、タイプライター、マイクロフィルムだった。今日では、多くの社会学者がJstorやノートパソコン、Endnoteを頼みにしている。では、いわゆる「南」の社会学者はどうであろうか。

1990年代の初頭にデジタル格差が研究され始めたころ、インターネットに接続できるかどうか調査されていた。しかし、インターネットの利用法が複雑さを極める今日では、活動やスキルレベル、技術的な資源などの階層化も含めて分析されるようになっている。インターネット接続率の国際比較をした研究者はいるが(たとえば、Ono and Zavodny 2006)、研究者がさまざまな国家の政治的経済的なスペクトルを横断する際に直面するデジタル環境の違いについてはほとんど研究されていない。ISAにおいても、会員間のデジタル環境の不平等は互いのコミュニケーションの方法に影響を与える。たとえば、オンラインによる共同研究は、デジタル環境に恵まれない大学や国々の社会学者が国際会議への渡航援助を申請する際に直面する問題をかならずしも解決しない。

データに目を向けると、ISAの会員が直面する難題をより鮮明に描くことができる。ISAは、本国の経済状況にしたがって、会員をA、B、Cのカテゴリーに分類している。Aカテゴリーで最大のISA会員をもつアメリカとイギリスでは(表を参照)、2008年におけるインターネット接続率

Comparison of Internet Access Rates by ISA Country Type

	United States	United Kingdom	Brazil	South Africa	India	Nigeria
Internet Access Rate	76%	76%	38%	9%	5%	16%
ISA Economy Type	A	A	B	B	C	C
Number of ISA members	704	289	176	157	249	134

-Percentages based on Internet users as percentage of population from 2008. Data source: [World Bank, World Development Indicators](#) - Last updated November 24, 2010. For interactive graphs, go to Google public data: <http://tinyurl.com/264z5fy>
-ISA information from ISA online data, June, 2010.

はそれぞれ76%である。正確なデータは分からないがおそらくかなりの確率で、両国のすべての研究者が高速な常時接続環境をもっている。それに対して、Cカテゴリーで最大の会員をもつインドとナイジェリアでは、インターネット接続率はそれぞれ5%と16%でしかない。しかし、ある国の平均接続率がどの程度であるかは、社会学者のオンライン接続率を示すものでも、オンラインでできることの複雑さを示すものでもない。たとえば、ナイジェリアの社会学者は基本的なインターネット接続はできるが、さまざまな制約に直面する。学生には十分にいきわたるほど十分な台数のコンピュータがないため、学生は自分でお金を払って利用せざるを得ない。停電が頻繁に起こる。データ分析や論文の作成に用いる最新のソフトウェアがない(たとえば、EndnoteやStata、AtlasTiなど)。また、一般的にJstorや一般的な学術誌へのアクセスも限られている。

ワシントン大学の社会学者Philip Howardはこれを「知的格差 intellectual divide」と呼ぶ。世界中のイスラム教国に関する彼の最新の著作『The Digital Origins of Dictatorship and Democracy』(2010)の研究に携わっている際に、彼は強い国家制度を政府が主導することによって、途上国の研究者は利益をうることを発見した。こうした国では、最新技術と高速のインターネット接続(たとえば、ブロードバンド)はおもに国立図書館や大きな大学に集中している。しかし、技術的な資源をどう分配するかは大学の裁量にまかされ、ときには国立図書館

と合同で管理されている。これは通常、国家にもっとも大きな「価値」を提供できる学部にも多くの資源が与えられることを意味している。結果として生じるのが、学問間の不平等である。たとえば、国家は伝統的な工学部や医学部こそもっとも大きな公共的な価値を提供すると考えることが多い。社会科学は通常、確かな学問分野に依存するより価値の低い学問とみなされているため、たとえば、社会学者は関係する学術誌の多くにアクセスすることができない。今や多くの学術誌はオンライン化されているので、工学や公衆衛生の学術誌への定期購読は社会学よりも優先される傾向にある。そのため、ほかの社会学者が書いた学術論文を読むことができない社会学者もいれば、クリックひとつで24時間アクセスできる者もいるのである。

あなたやあなたの学生はどのようなデジタル障壁を抱えていますか。ISAは会員の実際の状況に関心をもっており、会員の必要や要望をかなえられるような方法を作っていきたいと考えています。国名、地位、所属をそえて、あなたのコメントをJen Schradie(schradie@barkeley.edu)まで送ってください。(池田和弘訳)

[文献]

Ono, H., Zavodny, M. 2007. "Digital inequality: A five country comparison using microdata". *Social Science Research*. Volume 36, Issue 3, September, Pages 1135-1155.

Howard, P. 2010. *The Digital Origins of Dictatorship and Democracy: Information Technology and Political Islam*. Oxford University Press, Oxford.

[図] ISAの国別分類におけるインターネット接続率の比較
(横軸:アメリカ・イギリス・ブラジル・南アフリカ・インド・ナイジェリア / 縦軸:インターネット接続率・ISA経済分類・ISA会員数)

*パーセントは2008年の人口に対するインターネット利用者を示す(出典元:World Bank, World Development Indicators, Last Updated November 24, 2010)。よりインタラクティブなグラフについては、google public dataを参照のこと(<http://tinyurl.com/264z5fy>)。*ISA information from ISA online data, June, 2010

サイエンス・サークル SCIENTIFIC CIRCLES (つづき)

い社会学者が集まり、ネットワークを広げ、協力関係を築くための広い範囲にわたる討議機会を形成することになった。特にWłodzimierz Wesolowskiポーランド社会学会会長が学生活動を歓迎し、それらを組織化、制度化したことに始まる。それからすぐに、その部門における新しいメンバーが増え、新しいプロジェクトが創生し、サイエンス・サークルは若手社会学者の展望を描くための増大する役割を担い始めるようになった。

この部門における、ここ3年の間に起こった最も大きなプロジェクトとして、「移動式ワークショップ」といったものがある。今日までに、私たちは125人の学生と25人のシニア科学者が参加した6つの会議を開いた。このプロジェクトの基本的な問題関心は、大学ごとに異なる理解を持つ、科学的学問としての社会学そのものの観察にあった。「移動式ワークショップ」の最後の2日間は、様々な大学から集まった15人から30人の学生が、学術スタッフから指導をうけるために一つの社会学施設に集合した。会議はサイエンス・サークルに所属する学生と彼・彼女ら自身の教員を招くことによって組織された。すべての活動は一つの主要テーマに関連するもので、各会議のプログラムは理論的前提と経験的実践とが含まれていなければならない。通常、いくつかの非常に短い調査が実施される。いくつかの経験的データが大学の外側から学生によって集められ、その後、教員とともに分析される。

私たちの見地からして、最も面白い「移動式ワークショップ」は2009年3月にポズナニにおいて開催されたものであった。参加者は日常生活の社会学と物質文化に関する研究に専念した。ポズナニにおける社会学に関する簡単な歴史が講義の初めに紹介された。私たちは、ポズナニ大学における初代の社会学教授フロリアン・ズナニエッキと、同大学の戦後の歴史について学んだ。会議の理論的部分は2つの講義によって構成されていた。Rafal Drozdowski教授が、近年、なぜ日常生活の社会学が流行しているのかについて9つの理由を挙げた。また、2つ目の講義では、Marek Krajewski教授が物質の対象の研究を

私たちに紹介した。彼は、人と人工物の関係は対照的であるという議論をした。この2つの講義がポーランドにおけるその専門の指導的研究者によって行われたものであったということは、言及に値する。



ポーランド社会学会 (the Polish Sociological Association) の最近の会合に集った若手研究者たち

経験的実践における講義の間、学生たちは4つのグループに分かれ、一般的なものとそうでないものについて問いただした。このフィールドワークの間に実施された観察は、ポズナニの様々な方面から記述され、小型カメラやデジタルボイスレコーダによって記録された。そして大学に戻ってから、学生たちは彼らの調査結果を報告した。この議論を通じて、一般的ではないものというカテゴリーに属するものは、状

[16ページへつづく](#)

コロンビアで関心を抱かれている社会学に関するメモ

NOTES ON AN ENGAGED SOCIOLOGY IN COLOMBIA

アナ・ルシア・パッツ・ルエダ(イセシ大学)

by Ana Lucía Paz Rueda, Icesi University

コロンビアには、私立大学に6つ、公立大学に9つの、合計15の社会学のプログラムがある。専門としての社会学は、1959年に、村落問題、政治的イシュー、社会変動、国家の分析に特別の関心を払うものとして出現した。その後の数十年、社会学的関心は、文化の社会学はもちろんのこと、産業や都市の社会学をも含むものへと拡大した。1970年代には、暴力や社会崩壊といった国全体の問題に再び焦点を合わせる必要から、アクションリサーチを含む新しい方法論の探求に向かった。1969年には、政治的な危機によって、社会学のグランドセオリー周辺の方法論は整理統合に向かった。

1990年代には、(社会学的)方法論は、新しい社会学のプログラムがつくりだされたことによって再び姿を現した。この15年では、活発なプログラムの数は5から15へと増加した。その多くは、異分野交流の可能性を創造している社会科学・人類学のカレッジに間借りしている。それらのプログラムのうち、60%は10学期の長さで、残りの40%は8学期の長さであり、どちらも平均して155の単位取得を求められる。それらのプログラムの約半分は、応用研究や社会に介入することに重きを置いている。専門性の中心は、社会を変革し、コロンビアにおける問題を理解し、分析し、解決することに貢献するアイデアの周辺に置かれている。

コロンビアでは、社会学を含む少なくとも22のリサーチセンターがあり、そのうちの約75%は公立大学とつながりがある。社会学の専門訓練は、方法論(25%)、学際的な講座(25%)、社会学的トピック(18

%)、理論(15%)に重点を置いている。方法論の講座は、量的アプローチと質的アプローチとをバランスさせているが、マネジメントや社会政策の講座への関心も高まっている。理論の講座は、15のうちの9つのプログラムで、マルクス、ウェーバー、デュルケムなどの著作が教授されるなど、いまでもなおこれらの著作に中心が置かれている。

以上の簡単な比較によって、コロンビアの社会学が長い軌跡をたどり、重要な課題に直面していることがわかる。コロンビアの社会学は、いくつかの学術機関で社会学的な枠組みで研究する関心が高まっていることからわかるように、成長の可能性を秘めている。なお、少なくとも3つの改善の余地もある。1)経済、正義、公共文化の形成など、国にとって極めて重要な事項に関する公の議論を深めていくこと、2)新たなトレンドをとらえることのできる、新しく構造化され体系だった考え方に対して注意を高めていくこと、3)人々の生活に手を差し伸べる方法を深化し拡大することである。我々社会学者は、我々の仲間のみでなく、立法者や社会の活動家にも読まれるような対話の形式を新たにつくりだす必要がある。社会学は、哲学に由来することからくる普遍性の自負によって、もしくは社会学たるゆえんそのものから、これらのつながりを創造する力が十分ある。我々は他者と共同してわかりやすい行動の形式をつくりださなければならない。社会学者は、こうしたつながりを考え、作ることができること、またつながりを本能的に感じ取って、理論、実践でつながりを生みだせることが求められているのである。

(高見具広訳)

フレッシュ・キドニー FRESH KIDNEYS

(つづき)

しかし、コスモポリタン化を語ることは、植民地主義についての古めかしい語りの新しいバージョンに過ぎないのではないのだろうか。スチュアート・ホール(Stuart Hall)がかつて次のように書いた有名な言葉がある。「我々はずっと、イギリス人という名の紅茶の中に入れられた砂糖のような存在である」。それゆえ、そこには明らかにされ認識されるべき連続性と差異がある。コスモポリタン化という観念は、グローバル化言説の大部分にみられる「地域的バイアス」を克服し、今日の「文化的苦痛」の歴史に敏感でなければならない。しかし、それは同時に「再帰的近代化」に関する現時点での将来に対する予想でもある。だがそれは、世界資本主義の「勝利」が、コミュニケーションと医療技術、そしてそれらの「副作用」との組み合わせによって、南北国民国家のモダニティのもつ制度と基本的な二分法——ナショナル／インターナショナル、我々／彼等、文化／自然、中心／周辺——を侵食するからである。私たちは世界のコスモポリタン化が急進的に変化することを目撃させられるかもしれない。かつての中心は、世界の一定地域を開発している「過去のポストコロニアル」、特に中国やインドによって、「前・植民地化」されているのではないのだろうか。例えば中国は今日、欧州危機と闘うことを誓約すると同時に、自分の投資を保護する形で、欧州問題に干渉している。欧州を包括することにより、中国は自分を保護しているのだ。これもコスモポリタン化である。

そこで、次のようなひとつのことが確かだと言える。社会学の古典が「方法論的コスモポリタニズム」のパイオニアとされてきたかどうかに関わらず、今日「方法論的ナショナリズム」は、コスモポリタン化がもつ時代を画する諸事実について、「北」と「南」の両方の社会学を盲目状態にしている。

それはなぜなのだろうか。国家がそのまなざしを注ぐもの——ひとつの領地、ひとつのパスポート、そしてひとつのアイデンティティ——は、世俗の三位一体である。そのため、社会的不平等に対する国家の態度は逆になる。それは、国民国家の境界線で止められている。社会的な不平等が開花して咲き乱れる場合があるが、それはつねに国家の塀内の庭側にあるものだろう。つまりそれは、せいぜい反倫理的な不法行為の原因でしかなく、政治的には意義を持たないものである。

国家の境界線は、我々と彼等の間、そして政治的に意義を持つ不平

等と意義を持たない不平等の間に、明確な線引きをした。法的に制度化された焦点は、国民社会の内側の不平等に置かれている。それと同時に、国民社会間における不平等は消え失せつつある。グローバル・レベルでの不平等を「正当化」することは、制度化された「見て見ぬふりをする」ことに基づいている。例えば、ヨーロッパにおいて、国家が注視することは、世界にある悲惨さを直視することからの「解放」である。

それは双方向からの排除というやり方によってなされる。それは排除されたものを排除する。そして不平等に関する社会学は、国民国家間の不平等と不平等一般とを同一視しており、不平等に対して反省す

“

...We need to define, discover,
and combine post-Southern and
post-Northern framings...

”

私たちは「ポスト南」と「ポスト北」という枠組を定義し、発見し、つなぎ合わせる必要がある。

る側ではない。グローバル・レベルでの不平等が、国民国家の政府と国民国家の社会学——価値自由を主張する社会学!——との間での暗黙の合意に基づいて、どんなに強固に「制度化」されているかということは本当に驚くばかりである。

レーウィン・コンネルは次のように論じている。「確実なことは、ヨーロッパ中心の思考の枠組を打ち破る方法は、非ヨーロッパ中心の思考枠組を研究することにある」。私はこの論に同意はしない。今日の世界を作り上げているモダニティのまだら状態を測定するにあたり、私たちは「ポスト南」と「ポスト北」という枠組を定義し、発見し、つなぎ合わせる必要がある。その意図は、どこにもないような客観的な「神の視点」幻想を再確認することではなく、フランス、オーストラリア、日本、メキシコ、インド、南アフリカなどで見受けられる日常的な社会学的問題に対する実践的解答を見出すことなのである。では、どのようにコスモポリタン化された世界における混合物・混和物を調査するのか。

このことは、すべてコスモポリタン理論が提案すべきものであろうか。その批判的な辛辣さと熱望はどこにあるのだろうか。純化されていないコスモポリタン化は、グローバル・レベルでの統治を支えるものとして「現状」に組み込まれることはないのだろうか。それとも、コスモポリタン理論は、批判的な影響力を押し上げる段階的な力や手段を持っているのだろうか。コスモポリタン理論は、批判的な自己再帰的コスモポリタニズム(複数の!)へと自力で引き上げられるのだろうか

[16ページへつづく](#)

グローバル・インターフェース・プロジェクト——社会学と運動家との連繋——

THE GLOBAL INTERFACE PROJECT: LINKING SOCIOLOGY AND MOVEMENT ACTIVISTS

クリスティナ・フレッシャー・フォミナヤ(アバディーン大学)
by Cristina Flesher Fominaya, University of Aberdeen

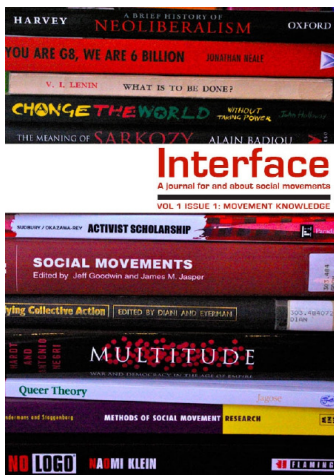
『インターフェース』(『インターフェース: 社会運動のための／社会運動に関するジャーナル』)“Interface: A Journal for and about Social Movements”は、活動家たちと、言語・文化・イデオロギー的な違いを超えた社会運動にアカデミックな見地から携わる者との間で、そして学問と活動家の伝統との間で、世界的な対話の構築を目指すオープン・アクセスな、多言語によるジャーナルである。その構想は、それまでのアカデミックな社会運動に関するジャーナルがしばしば自分たちが学んでいる運動とは、以下に挙げる2つの点で、かけ離れているように感じていた活動家および学者たちから成るグループから生まれた。まず一つ目は、知識というものを生み出す人びとによる理論的な関心事は、必ずしもその調査対象(社会運動そのもの)にとって関連性や有益性があるわけではないことである。そして二つ目は、知識を生み出す人びとは、かならずしも運動そのものに対して価値や貢献点を持ち合わせていないことである。

それと同時に、運動によって生み出された知識、運動を通じて普及したウェブサイトやその他のメディアは、しばしば関心を持つ問題の範囲が狭かったが、地理的・政治的に異なる現実に対する他の運動に関しては、必ずしも多くを述べる必要があったわけではなかった。『インターフェース』を立ち上げた編集者たちは、これら二つの重要な知識の源を、まさしく現実にある世界規模の格差を超えて一緒にしたいという考えがあった。我々は編集チームの構成を、我々が世界的に切望していることを反映したものにしたと思ったが、それを実現するモデルを構築するのに2年の歳月を要した。我々編集チームは、直接会ったことがないメンバーもいるヴァーチャルな集団であり、また、どこからも資金提供を受けていないという事実に加えて、ジャーナルの編集方法に関して他に2つの特筆すべきことがある。1点目は、1人から3人の編集者と協力者グループから構成された、地域ごとに半ば自律したグループに分権している編集チームであるということである。こ

[16ページへつづく](#)

社会学と運動家との連繋 SOCIOLOGY AND MOVEMENT ACTIVISTS (つづき)

これらのグループは、それぞれの地域から提出されたものを処理し、共感と協力しようという気持ちとに基づいた編集プロセスを持とう、という我々の願いに賛同する協力者と共に作業を行っている。2点目は、通常とは違ったピア・レビュー・プロセスというものを行っており、協力者がそれぞれの文章を、活動家およびアカデミックな視点の両方から査読するという点である。理念として、これは一人の活動家と一人の学者からのピア・レビューを意味しているが、実際には、これら二種類の人が一人の人間である場合が多いので、我々は査読者に、文章の妥当性について、実践者および学者へ向けたコメントをするよう依頼している。我々はその両方の受け取り手にとって関連性があり、特定の経験に基づいた運動や問題の詳細さを超えて貢献するものを出版できるように努力している。ジャーナルは、編集者たちの特定の関心に即したテーマに基づいており、毎回そのテーマに合わせた編集者による小グループを編成している。



『インターフェース(Interface)』創刊号
(写真提供: Elizabeth Humphrys氏)

2009年に刊行されて以来、我々は運動に関する知識、そして市民社会と社会運動との関係、危機と革新的な変容、そして運動とオルタナティブなメディアに関する号を発行してきた。現在準備中である今後発行される号では、抑圧と社会運動、およびフェミニズムと女性運動に関するものである。また毎号、テーマ外の投稿も含まれている。これまで、我々は多くの協力者と共に、すなわちアンゴラ・アルゼンチン・オーストラリア・オーストリア、ブラジル、イギリス、カナダ、ドイツ、ギリシア、ハンガリー、アイルランド、イタリア、ラトビア、メキシコ、ノルウェー、パレスチナ、ポルトガル、ロシア、南アフリカ、韓国、スペイン、スウェーデン、タイ、トルコ、アメリカ、そしてベネズエラにいる執筆者によって、しかも6か国語による論文や運動家へのインタビュー記事、論説、アクション・ノート、キー・ドキュメント、争論、書評、評論といったものを、出版してきた。2010年3月より、我々のウェブサイトは130か国以上の読者を得ている。我々はウェブサイト(www.interfacejournal.net)にて、投稿者および読者、協力者を募集しています。

(芝真里訳)

サイエンス・サークル SCIENTIFIC CIRCLES (つづき)

況の社会的定義と非常に強い関係性を持っているということが明らかにされた。

ポーランド社会学会による「サイエンス・サークル」の創設は、若手社会学指導者のためのスクールと名付けられる副産物を提供した。それは、サークルのグループ運営、コミュニケーションと交渉に関わる指導者を育成するために計画された部門である。毎年、その育成活動が4週から5週連続で週末に続けられており、しかも異なった都市で行われている。このようにして、若手の社会学者が様々な研究者に出会い、様々なサイエンス・サークルが活動報告を行うことが可能になるのである。指導者育成スクールは未だポーランド社会学会の一部門として定着していないが、100人ほどの卒業生のほとんどがその部門のメンバーであり、プロジェクトに深く熱意をもって貢献している。

(速水奈名子訳)

マルチ・バーサルイズム MULTI-VERSALISM

(つづき)

出席者は、また、科学的な知がいかにしてその土地固有の知を含むことができるのかを議論した。Michael Christie(オーストラリア・チャールズダーウィン大学)は、彼の大学とオーストラリアの先住民社会との共同について報告した。ここ数年間、研究者たち(先住民の共同研究者を含む)は、デジタル技術をコミュニティ維持に結び付けること、つまり伝統的な知の世代間伝承に取り組んできたが、それだけでなく、伝統的な知を大学での教育・研究に活用することに取り組んできた。同様に、César Carrillo Trueba(メキシコ国立Autónoma大学)は、メキシコ固有の農学・医学の妥当性に関する興味深い事例を提供した。

参加者は、フーコーの述べる権力と知との結びつきについても取り上げた。私は、大学のシステムや社会的な知を生成するそのシステムが、アラブ世界においてエリート形成に大きな影響を与えていることを示した。私は、グローバルとローカルとを橋渡しするために、対話と異文化間の翻訳を主張した。社会研究の生成物は、海外の同僚との対話を通じて普遍的なものになり、ローカルな共同体との会話を通じて目の前の課題と関連するものにもなる。Pablo Kreimer(アルゼンチン国立キルメス大学)は、ラテンアメリカの科学・技術・社会の研究に基づいて、グローバル・ローカル間の同様のジレンマについて詳しく述べた。例えば、「周縁的だがグローバル化した」社会において、国境を超えたフィールドに埋め込まれた科学的文化とローカルな知、文脈自由な実験室での実践と市民社会での活動との間には緊張があり、人々はそうした科学の影響について疑義を呈することはできるが、認知的な基礎に関しては疑問をはさめない。

Cláudio Costa Pinheiro(リオ・デ・ジャネイロ社会科学・歴史学部)は、権力と知の結びつきについての2つの説得力のある事例を示した。一つ目は、フランスの人口学者であるAlfred Sauvyの「第3世界」という概念がブラジルにおいて開発され、ブラジルの権威ある学術雑誌に1951年に最初に公表されたが、それが「普遍的な」概念になったのは、翌年にフランスの“Observateur”誌で公表されてからであったという例である。「第3世界」理論の起源がブラジルにあることは、北半球(理論の開発者)と南半球(理論の消費者)との決定的相違を反映する形で、消去されたのである。しかしながら第二に、「第3世界」理論とは対照的に、Pinheiroは、ブラジルから南北両世界に向けて発信することができたものとして従属理論の例も示した。しかし、北半球にとって、それが強力な知的運動である際は、この理論はイデオロギーと関連付けられた。

全般的に見て、この会議は、ISAにおける“global sociology”周辺の議論において中心であり続けてきた問題系について具体的に扱った、刺激的な会議であった。我々社会学者は、隣接科学における討議と連携し、そうした討議を理解することもまた大切なことであろう。

(高見具広訳)

フレッシュ・キドニー FRESH KIDNEYS

(つづき)

か。答えは、それは可能だ、であるが、しかしこのことはもうひとつ別の問われるべき重要な問題であろう。

もうひとつの読みの可能性の目録を提供してくださったレーウィン氏に、心から感謝いたします。

(芝真里・西原和久訳)